町長ひとりごと ⑥0

斉藤 譲

またここに、新しい年を迎えた。

いつものことながら、新年の清々しさに感動する一方で、また一つ馬齢を重ねてしまったという思いと、曲がりなりにも年輪を刻んだという思いが相半ばをしている。

▼ところで、この「町長のひとりごと」も、今回でちょうど六十回を迎えた。

この五年の歳月には、卒直にいっていままでの私の人生総てが凝縮されているような気がする。町づくりにかける情熱は、気負いや焦りを呼び、次々と立ちはだかる問題の発生は、心の不安を呼び起こし、私の心の中は常に揺れ動いてきた。しかし、厳しさや苦しさには、決してただの一度も背を向けたことは無かったと断言できる。

こんな心理状態の中で、書き続けてきたこの「町長ひとりごと」は、内容の良し悪しは別にして、多勢の人に是非とも知らせたい、訴えたいという思いと同時に、今思えば自分への戒めでもあったような気がする。それにしても今年こそは、何事にも動じない不動の心をもって、任を果たしていきたいと念願している。

▼昨年、といっても先月師走のことであるが、海匝町村会で関西方面に行政視察をした際、半日ではあるが古都奈良の市内を見学する機会を得た。

私にとって奈良は、高等学校の修学旅行で訪ねて以来のことであり、ちょうど三十年振りのことであった。その日の朝は、穏やかな青空が広がり、松の緑と銀杏などの紅葉が、鮮やかな彩を見せる中に、銀色の甍の大屋根が幾つも聳え、まさに奈良の都は落ち着いた気配と、往古の香を漂わせていた。

奈良・平城の都跡は後に興り長く続いた京都・平安の都跡の華麗さとは違って、日本文化の萌芽の時代を語るにふさわしい質素で優美な佇である。高校生の私は、教科書で学んだ歴史の舞台をのぞく喜びや感動を味わう余裕もなく、ただかけ足で通り過ぎてしまったようだ。

▼目の前の東大寺大仏殿は、まるで辺を睥睨するかのように大きく聳え立ち、その大棟の両端には鴟尾が、まばゆいばかりに金色に光輝いている。人の足音が、ひときわ高く響くほど四囲は森閑としており、思わず遠い千二百年前の天平の昔に、タイム・スリップしたかのような錯覚にとらわれた。この大仏殿や、中の毘盧舎那佛（大仏さま）も、平安時代の末期と戦国時代に二度も兵火によって焼失したり、損傷を受け、現在の姿は、江戸時代になって再建されたものであり、大仏殿の大きさは、創建された当時の約六割の大きさだと案内書は記している。

大和路一景

▼身の丈十五メートルにも及ぶ大仏像の前に立ったとき、はじめはあまりにもその偉容さに、圧倒される思いがしたが、静かに向かい合っているうちに、何とも名状し難い心の安らぎを覚えた。それは、大仏さまの一切のこだわりを捨て、衆生のあらゆる苦しみや、悲しみをやさしく包みこんでしまうような慈悲の心に触れたからかもしれない。とに角、人間ではとうてい到達し得ない、何かを感じた。

▼私はその時、ふと昔読んだ「大仏開眼」という戯曲のことを思い出した。この粗筋は、大仏造立の責任者となった若き大仏師、国中連公麻呂が、大仏造立をめぐる朝廷の政治上、あるいは仏僧間の宗教思想上の対立によって起こる幾度もの妨害を受け、挫折をしながらも、最後はわが身を犠牲にして、見事完成に導くというのが縦糸となっている。横糸には、公麻呂に恨みを抱く前造立責任者の娘との悲恋が、織られているのである。

宗教上の対立というのは、大仏の姿を日本人風にするのか、教典の教えどおりインド風にするかということであり、公麻呂ははじめは日本風の姿をめざしていた。

公麻呂は、工事が妨害にあい振り出しにもどる度に苦しみ、嘆き、酒におぼれた。しかし、いつしか自分をとり戻した公麻呂は、姿羅門法師の華厳経の講義を聞くうちに、自分がやみくもに日本独自の仏像芸術を求め、経文をおろそかにしてきたことを悟って、仏像の顔は教典どおりインド風に一大転換を図ることにした。一度決心をした公麻呂は以後いかなる妨害、中傷にも微動だにすることなく、一途に工事を進めるのである。

▼工事も終りに近づいた頃、横恋慕をし、妬む相手は卑劣にも、最後の妨害を図るのである。公麻呂が目を離したすきに、まだ開いてはならない銅汁の出口を開けてしまい、これに気づいた公麻呂は、出口に身を挺してこれを塞ぎ、大仏崩壊を未然に防いだ。

しかし、自らは大火傷を負い、大仏の完成を見ることなく、悲壮な最期を遂げるのである。

私はあらためて公麻呂の不動の心を思い、哀れを偲んだ。しかし大仏さまは、微かな笑を浮かべるばかりであった。